

## 特別寄稿

# 日伊成人教育研究の 40 年にわたる交流

佐藤一子<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 東京大学名誉教授

### まえがき

このたび『生涯学習基盤経営研究』編集委員会のご了解をえて、寄稿の機会を得たことを感謝申し上げます。

私は、1993 年 4 月から 2007 年 3 月まで 14 年間、当コース（当時の名称は生涯教育計画講座）教授として在任しました。生涯学習という新たな成人教育思想の普及のもとで、社会教育制度をどう拡充していくかということが大きな課題となっていた時代状況の下で、大学院のゼミでは国際的視野の形成をめざし、日本、アジア諸国、EU やユネスコの生涯学習の理念形成・施策に関する比較研究を共同研究の主題にすえていました。私自身のテーマとして大学院 OD の頃からイタリア成人教育史研究にとりくみ、東大在任中は科研費などの助成で毎年のように数週間のイタリア訪問調査をおこなっていました。

長年にわたる研究交流をおこなってきたフィレンツェ大学教育学部のパオロ・フェデリギ教授が本年定年退職を迎えられ、記念論集（英・伊語版）に寄稿することになりました。日伊成人教育 40 年の研究交流について伝える機会はあまりないと思いますので、社会教育研究の記録として日本語版の修正版を寄稿させていただきます。

### 1 イタリア成人教育との出会い

私が初めてイタリアの成人教育に出会ったのは 1975 年である。当研究科・教育行政学コース（社会教育専修）の OD であった時期に社会教育推進全国協議会の研究者、職員など 10 人ほどのグループで海外視察をおこなうことになり、イタリア、フ

ランス、ルーマニアを訪問した。1967 年大学院進学以来、社会教育の宮原誠一教授のゼミで労働者教育研究をおこない、イタリアの労働者の学習権運動に関心をもったことが背景にある<sup>1</sup>。この海外視察の翌年に埼玉大学教育学部に赴任し、1979 年 4 月から 1 年間、日本学術振興会特別研究員としてイタリアに派遣されることになった。

当時の日本では英米・ドイツ・フランスなどの成人教育研究の蓄積とともに、パウロ・フレイレの研究を手掛かりに発展途上国の成人教育にも新たな関心がむけられつつあった<sup>2</sup>。しかし南欧圏やアフリカ諸国は「遠い国」であった。イタリアについては歴史研究、政治・社会思想史研究、芸術・建築史などの分野の研究は豊かな蓄積がある一方、教育学についてはモンテッソーリの幼児教育・発達論が知られていた程度であった。成人教育についても、大学拡張や民衆大学などの欧米的伝統は十分根付いておらず、むしろ識字のための成人学校や文化・レクリエーションサークルなど、「民衆教育・民衆文化」のボランティアズムが主軸となっていたことを後に知ることとなった。

成人教育研究者とのコンタクトももたずにイタリア北部の大学に留学する予定であったが、現地到着後にフィレンツェ大学の成人教育研究が活発であると知り、フィレンツェ大学を訪問した。フィレンツェ大学教育学部成人教育講座教授のフィリッポ・デ・サンクティス (Filippo M. De Sanctis) と当時助手で後に教授となるパオロ・フェデリギ (Paolo Federighi) と出会い、支援・協力のもとで大学院生や学生たちと一緒に学習権運動のフィールド調査に参加することになった。日本の社会教育についてミニ講義をおこない、院生や学生と討論を

おこなうという場面もあった。1年間の滞在を通じて、私は民衆文化運動の伝統の色濃いイタリアの成人教育に魅せられた。帰国後、労働者の学習権運動やイタリア文化レクリエーション協会 (Associazione Ricreativa Culturale Italiana, ARCI) の活動について紹介した初めての著書を刊行した<sup>3</sup>。学歴水準の低い社会でありながら、労働者の学習権保障と市民が主体的に創造する文化が市民社会に活力を与えており、その現場に触れたことで成人の学習権保障と文化の協同について関心を深め、私自身のライフワークを形成していくこととなった。

その後、大学の教育活動やフィールド研究などで忙しくイタリア研究が滞る時期もあったが、1993年に東大に赴任して以降、ほぼ毎年イタリア訪問調査をおこなうようになった。フェデリーギはデ・サンクティスの後継者としてフィレンツェ大学の教授となり、ヨーロッパ成人教育協会 (European Association for the Education of Adults, EAEA) の会長としてヨーロッパ各地の成人教育団体と密接なコンタクトをとっていた。渡航のたびに最先端の情報や資料を準備して下さり、ベルギーのEU本部への出張に同行して飛行機の中で討論を続けたこともあった。フィレンツェ大学を中心とする40年間の研究交流は、私にとって日伊比較成人教育研究を継続する支えであった。

## 2 労働者の学習権運動と成人教育研究の活況

1950年代から60年代にかけて、イタリアでは「成人教育」(educazione degli adulti, adult education) という用語はあまり普及しておらず、むしろ「民衆教育」(educazione popolare, popular education) の地方的伝統が色濃く、英米、北欧諸国に比して成人教育の制度化は立ち遅れていた。ヨーロッパ文明の源流をなす偉大な文化遺産をもちながら、学校制度の普及は遅れており、1970年代に入っても非識字率が5%以上、6歳以上人口のうち中学校卒業資格者は全人口の15%未満、高校・大学合わせて8%未満という状況であった。

しかし、1970年代に労働組合を中心とする民間成人教育運動は大きな発展を遂げつつあった。デ・サンクティスとフェデリーギは、これらの民間成人教育運動にコミットし、幅広いネットワークを形成しながら実践的な研究を開拓していった。二人の

助言を得て、私は全国に100万人以上の会員をもつイタリア文化レクリエーション協会 (ARCI) の各地の支部を訪ね、イタリア労働総同盟 (CGIL) がローマで開設している中央労働学校に参加するなど、フィレンツェからイタリア各地へと動き回ることになった。デ・サンクティスが、ユネスコ成人教育推進委員会委員長のラングラン (Paul Lengrand) と協力してサルデーニャ島でとりくんだ成人教育プロジェクトについても現地を訪ねて話を聞いた。映画上映と話し合い学習を中心とする農民の学習で、戦後日本のナトコ映画や共同学習を想起させるような活動がみられた。

1970年代は労働組合が獲得した有給教育休暇を活用して夜間の教育機会などで学ぶ動きが活発化していた。1969年の「熱い秋」(労働者憲章の制定をみる大闘争) をきっかけに通学労働者の学習権保障を求める運動が広がり、1973年に機械金属労働組合が「150時間の有給教育休暇」を学習権として労働協約で獲得した。同様の協約が各産業分野で実現され、1974年に公教育省は特設夜間中学校課程 (通称「150時間コース」) の設置に踏み切る。私のイタリア滞在の時期は、中学校卒業資格を持たない労働者、青年、女性たちが、毎年数万人も有給教育休暇を行使して夜間コースに参加し、義務教育の再履修をおこなうという学習権運動の発展期であった。

ちょうどこの時期、1974年に国際労働機関 (ILO) が「有給教育休暇に関する条約」を採択する<sup>4</sup>。成人教育の後進地域とみなされていたイタリアの動向はヨーロッパ諸国の注目を集めた。ヨーロッパ余暇教育センター (European Centre for Leisure and Education) 発行の『ヨーロッパの成人教育』(Adult Education in Europe, no. 10, 1981) でイタリア特集が生まれ、デ・サンクティスとフェデリーギがイタリアの成人教育史、法制度、実践の報告を掲載している。1950年代に北欧・中欧諸国が中心となって発足したヨーロッパ成人教育協会 (EAEA) にも新たに南欧・東欧諸国が加入するようになり、成人教育振興に向けてヨーロッパ全体の国際協力が発展していった。

イタリア国内でもデ・サンクティスやローマ大学教授のロレンツェット (Anna Lorenzetto) を中心にユネスコ・パリ本部生涯教育部門の責任者ジェルピ (Ettore Gelpi)、バルマ大学教授のデメ

トリオ (Duccio Demetrio) などが参加して、雑誌『成人教育』(Educazione degli Adulti) が発刊されることになった。イタリアの成人教育研究はかつてない活況の時代を迎えていた。

### 3 EU 統合過程における生涯学習計画の推進とヨーロッパ成人教育協会

ヨーロッパ生涯学習年(1996年)を機にEUレベルでフォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルな教育を連携させるグルントヴィ計画にむけて国際協力が進む。フェデリーギはEUレベルの成人教育・生涯学習の政策立案に力を尽くした。

この時期に彼は著書『ヨーロッパの文脈における教育過程運営の戦略』を刊行している<sup>5</sup>。ここでは、成人教育の政策立案、国・自治体と市民社会の合意プロセス、成人教育施設の整備、職業訓練や芸術文化振興などの関連分野と成人教育行政の連携など、生涯学習推進のための現代的な政策課題に焦点をあてている。「教育のストラテジーを形成し、社会的な教育について計画し、政策を決定し実現することについての理解と行動への科学的な力量を強めることが課題である」と指摘し、EUレベルで生涯学習システムにおける連携・協働、ネットワークをどう発展させるかという新たな段階にむけた問題提起をおこなっている。

フェデリーギはヨーロッパ成人教育協会(EAEA)の会長として、1997年にドイツのハンブルグで開催された第5回ユネスコ国際成人教育会議の準備に関わり、さらにEU統合過程におけるリスボン戦略策定、ソクラテス計画などの成人教育政策の立案にも関わってきた。第5回国際成人教育会議には1400名というそれまでにない多数の参加者があり、政府関係者だけではなく、市民団体・NGO、研究機関、財団など約300団体からオブザーバーが参加し、「21世紀の鍵として成人学習」について広い視野から討論がおこなわれた<sup>6</sup>。

ドイツのハンブルグにあるユネスコ教育研究所は国際会議に先立って2年間の研究プロジェクトを実施し、グローバリゼーションのもとで重要な役割を果たすNGOと公共機関がどのようなパートナーシップを構築するかを検討課題にすえた。フェデリーギの紹介で、私は1995年と1996年の2度にわたってハンブルグに滞在し、研究所の

スタッフと討議する機会を得た。国際成人教育会議の最終日に採択された「成人学習の未来へのアジェンダ」「成人学習に関するハンブルグ宣言」は、その後の「国連識字の10年」(2001年採択)や「持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」(2002年採択)など、生涯学習をめぐる全世界的な国際協力への道を開いていく。

その準備過程の研究成果をまとめてフェデリーギの編集による『ヨーロッパ成人学習用語事典』がEAEAから刊行された<sup>7</sup>。EU統合過程における各国の連携協働によって作成された画期的な事典である。事典の刊行は、国際協力の構築過程でそれぞれの国々の成人教育の多様性について相互理解を深め、共に協力することを促すうえで大きな意義をもっていた。「多様性のヨーロッパ」にふさわしい学習社会の構築に向けて、政府・自治体と共に多くのNGOとの連携に目を向けている点が示唆的である。

この事典は、1970年代にユネスコでの成人教育共通用語を整理したC.ティトウムスらの『成人教育用語集』の研究成果を受け継ぎ、ヨーロッパ22か国の用語の比較を行い、各国の成人教育の多様な実践的広がりや浮き彫りにしたものである。私は大学院の比較成人教育ゼミでこの用語集の翻訳をおこない、1995年に研究成果物として刊行した。さらに研究者、大学院生など20名以上の協力を得てEAEAの事典の翻訳にとりくみ、2001年に日本語版『国際生涯学習キーワード事典』を出版した<sup>8</sup>。日本語版刊行に際して、フェデリーギから次のような巻頭言が寄せられた。

「EU加盟諸国では、成人教育はいま著しい発展期にある。ヨーロッパ統合の過程、特に『知識経済』の確立により、加盟諸国では企業人や労働組合が成人教育の領域での発展と統合を促進している。(中略)かつてはヨーロッパ社会のなかで、より進歩的な階層の要求の対象であったものが、今日ではEU諸国とその生産システムにとって共通の目的となってきた。かつては限られた、力の弱いグループやネットワークのとりくみの成果にすぎなかったものが、現在では全ヨーロッパ、あるいはそれぞれの国、地方のあらゆる機関共通の、合意された目標となっている。(中略)現在では成人教育の立案、計画化、評価などが新たなさしせまった課題となっている。(中略)こうした状況のもと

で、成人教育の領域での多様なキーワードを相互に関連付ける成人教育事典をつくる作業は、かつてバラバラに活動していた人々の対話・交流を始めるのを助けることになる。 (以下略)

フェデリーギがEU統合過程における生涯学習の推進計画にコミットしていたことによって、私自身もヨーロッパ成人教育協会の主要国のメンバーを訪ね、ユネスコ教育研究所とも交流することができた。「多様性のヨーロッパ」の実態を理解することを通じて、グローバル化の中での日本、東アジアの成人教育・生涯学習について考えるための示唆を与えられた。その後2009年に学位論文『イタリア学習社会の歴史像—社会連帯にねざす生涯学習の協働』を提出し、ライフワークである現代イタリア成人教育史を刊行することができた<sup>9)</sup>。

#### 4 「統合的生涯学習システム」の構想と課題

EU諸国では1千万人を超える移民労働者や失業青年、ハンディキャップをもつ女性などの社会包摂にむけて、共通言語の習得や基礎的職業訓練、シティズンシップの育成など、グローバル化のもとでの生涯学習と教育訓練の体系化がはかられてきた。イタリアでもヨーロッパ水準に合わせて、フォーマルな教育制度とノンフォーマルな教育機会の統合、生涯学習と職業訓練の統合、能力の国際的証明、生涯学習の機会へのアクセスの積極的なサポートなど、州ごとに「統合的生涯学習システム」(il sistema integrato della formazione)が構想され、実現される段階となった。幼児教育から高等教育、さらには職業訓練や就労支援など、多様な公共と民間の主体が連携するためのガバナンスが模索されている。

このような構想を実現するうえで、大学の学部・学科名称も伝統的な教育学部 (facoltà di magistero) から「生涯学習学部」(facoltà di scienze della formazione) や生涯学習学科、社会文化学科などに変更されている例が多いことが注目される。イタリア語では「成人教育」(educazione degli adulti)、「生涯教育」(educazione permanente) を包摂する「生涯学習」(lifelong learning) のイタリア語訳の定着が遅れていたが、生涯学習と職業訓練の統合をふまえて、古典的な「形成・陶冶」(formazione) という用語が現代性をもって使われるようになった。

た。従来の学校教員 (teacher, insegnante) の養成から、より多様な教育指導者 (trainer, formatori) の養成へと学部の人材養成も幅が広がられている。

フィレンツェ大学教育学部でも、成人教育学、社会的教育学、職業訓練論、子ども・青年の学校外活動論などの学際的な交流を通じて、時代のニーズに見合った教育の人材の養成が行われている。フェデリーギが先駆的に提唱していたフォーマル、ノンフォーマルな多様な「教育過程」に関する科学は、彼のフィレンツェ大学教育学部長時代にいっそう現実的な教育課題となり、学部運営やカリキュラム改革にも反映されるようになった。「統合的生涯学習システム」の構想は、EUとイタリア、国・州・自治体と民間諸組織、大学と社会などの多様な次元、担い手によって現代的な学習社会への発展的プロセスをたどっていると思われる。フェデリーギは、ヨーロッパの成人教育国際ネットワークをリードしつつ、イタリア成人教育体制を現代的に変革するうえで重要な役割を果たした。

日本でも1980年代から90年代にかけて「生涯学習体系」への移行が政策課題となったが、2000年代、特に2010年代に入って「生涯学習社会」のビジョンは影が薄らいでいる。学歴一辺倒の学校中心社会の格差が広がる一方、高齢化・人口減少による経済的社会的衰退、地方公共団体の財政難、公共事業の民営化、若年生産人口の減少と劣悪な条件のもとで働く移民労働者の急増などによって、「万人のための学習権」「いつでもどこでもアクセスできる生涯学習の機会」への制度設計は困難に直面している。基礎教育への注目、教育機会確保法の制定は生涯学習構想の新たな展開といえるが、アジア全体の状況を視野に入れて、EUの経験にどう学ぶかは今後の課題である。

あらためて、国連SDGsの目標に即して地球規模で持続可能な社会をめざす生涯学習の発展にむけて困難を共有し、連帯するための対話を国際レベルで広げていかなければならない。フィレンツェ大学の研究者、トスカナ州の成人教育関係機関職員をはじめイタリア、ヨーロッパ諸国の成人教育関係者との40年間にわたる研究交流を糧として、今後さらに国際協力関係が発展するよう努力を続けていきたい。

## 筆者略歴

1944年、東京都出身。東京大学教育学部、大学院教育学研究科で社会教育学を専攻。1976年埼玉大学講師、助教授、教授、1993年東京大学大学院教育学研究科教授、2007年法政大学教授、2015年退職。元日本社会教育学会会長（2005年-2009年）。

## 主要著書

- 『イタリア文化運動通信』 合同出版, 1984.
- 『文化協同の時代』 青木書店, 1989.
- 『生涯学習と社会参加』 東京大学出版会, 1998.
- 『世界の社会教育施設と公民館』（共編著）エイデル研究所, 2001.
- 『NPOの教育力』（編著）東京大学出版会, 2004.
- 『現代社会教育学』 東洋館出版社, 2006.
- 『イタリア学習社会の歴史像』 東京大学出版会, 2010.
- 『地域学習の創造』（編著）東京大学出版会, 2015.
- 『地域文化が若者を育てる』 農山漁村文化協会, 2016.
- 『「学びの公共空間」としての公民館』 岩波書店, 2018.

## 訳書

- Bodo, C. 『自治体の文化行政』 [Rapporto sulla politica culturale delle regioni. Franco Angeli Editore, 1982] 佐藤一子、諏訪玲子訳、三省堂, 1986.
- Titumus, C. et al. eds. 『ユネスコ成人教育用語集』 [Terminology of Adult Education. UNESCO, 1979] 佐藤一子監訳、東京大学大学院教育学研究科社会教育研究室, 1995.
- Federighi, P. 『国際生涯学習キーワード事典』 [Glossary of Adult Learning in Europe. EAEA, 1999] 佐藤一子、三輪建二監訳、東洋館出版社, 2001.

## 注

- 1) 宮原誠一他 “共同研究 労働組合教育活動の現段階” 『東京大学教育学部紀要』 vol. 11, 1971.
- 2) 小堀勉編 『欧米社会教育発達史』（講座・現代社会教育III）亜紀書房, 1978, バウロ・フレイレ 『被抑圧者の教育学』（A.A.L.A 教育・文化

叢書IV）小沢有作他訳、亜紀書房, 1987, など参照。

- 3) 佐藤一子 『イタリア文化運動通信』 合同出版, 1984.
- 4) 佐藤一子 “有給教育休暇と国民の学習権” 〈小川利夫編『住民の学習権と社会教育の自由』 勁草書房, 1976）.
- 5) Federighi, P., *Strategie per la gestione dei processi educativi nel contesto europeo: Dal lifelong learning a una società ad iniziativa diffusa*. Liguori, 1996.
- 6) 佐藤一子 “21世紀への鍵としての成人学習—第5回国際成人教育会議報告—” 『生涯学習・社会教育学研究』 vol. 22, 1997, 佐藤一子 『生涯学習と社会参加』 東京大学出版会, 1998, など参照。
- 7) Federighi, P. et al. eds., *Glossary of Adult Learning in Europe*. EAEA, 1998.
- 8) Titmus, C. et al. eds. 『ユネスコ成人教育用語集』 [Terminology of Adult Education. UNESCO, 1979] 東京大学大学院教育学研究科社会教育学研究室比較成人教育ゼミナール訳, 1995, 佐藤一子, 三輪建二監訳 『国際生涯学習キーワード事典』 東洋館出版社, 2001.
- 9) 佐藤一子 『イタリア学習社会の歴史像—社会連帯にねざす生涯学習の協働』 東京大学出版会, 2010.

# Forty Years of Exchange Between Japanese and Italian Adult Education Research

Katsuko SATO †

† Emeritus Professor, the University of Tokyo

I first came to learn about adult education in Italy in 1975. In Japan at the time, little was known about adult education research of Southern Europe. I continued to exchange with University of Florence, prof. F. M. De Sanctis and prof. P. Federighi. Prof. Federighi was the president of European Association for the Education of Adults (EAEA), and had networks with adult education organizations in different parts of the Europe. In this paper I retraced forty years of exchange and focused on the movement for right to learning in Italy and the development of European collaborative network for adult education.